

入院中の子どもに付き添う家族との関わりのなかで看護者が感じる対応困難の要因

—家族の特徴に関する要因に焦点をあてて

2階東病棟

○川島 美保 北村 美鈴 田辺 有三 水間美智子

I. はじめに

当病棟では入院中のほとんどの子どもに家族が付き添っており、看護者が対応困難と感じるケースも多い。本研究では、付き添っている家族との関わりの中で看護者側が感じる対応困難の要因として7つの要因が抽出された。今回は家族の特徴を表す要因に焦点をあてて報告する。

II. 用語の定義

対応困難：子どもに付き添っている家族との関わりにおいて、看護者が言動の理解や対応方法に困惑したり戸惑ったりすること。あるいは、対応しながらもこれでよいのかと困惑したり、戸惑いながら家族に接している状態。

III. 研究方法

1. データ収集期間：H11年8月5日～8月31日
2. データ収集方法：半構成的インタビューガイドを用いた面接法（1回30分～60分）を行い、了解を得て録音した。
3. データ分析方法：KJ法
4. 対象者の概要：研究の主旨に同意を得た2階東病棟の看護師22～38歳の12名（平均29.5歳）、看護経験年数2～17年（平均8.6年）、小児看護経験年数0.5～15年（平均6年）

IV. 結果

1. <主張の強い家族>

1) 家族がニードを強く主張する

- ①家族が子どもや自分のペースを主張する：家族が病棟の時間的制限に合わせず、家族の生活時間を優先し、そのペースが守られることを最優先に求めてくるなど、家族のペースを主張すること。
- ②家族のニードと看護婦のケア・対応がずれている：看護者の行ったケアや対応が家族のニードとズレがあると看護者が認識すること。
- ③家族の訴えが多い：家族の要求や要望が細かかったり多いこと。
- ④家族が規則を守れない：看護者は家族に対し、面会や消灯時間、荷物に関することなど病棟の規則に関して説明をしているにも拘わらず守ってもらえないこと。
- ⑤患者、家族同士が不満を訴える：患者、家族から他の患者、家族に対する不満を訴えられること。

2. <ニーズを把握しにくい患者、家族>

1) 家族の訴えが少ない

家族の訴えが少なく、患者や家族の求めるものが分からないこと

3. <他病院と比較する家族>

1) 家族が他の病院と比較する

病院の違いによる看護ケアの方法の違いや設備的な問題など比較されること

4. <医療者として介入できない問題を抱えている家族>

1) 家族が抱えている問題を医療者として解決できない

家族の抱える経済的問題や離婚などの家庭内の問題を何とかしたいが、看護者の立場では解決できないこと

5. <患者の状態について理解不足の家族>

- 1) 家族が患者の状態を理解していない
- 2) 家族が自らの判断で看護者に対し指示的意見を述べる

V. 考察

1. 主張の強い家族

看護者は主張の強い家族のペースに巻き込まれ、自らの意思のもとに専門性を発揮しながら能動的に関わることが難しく、円滑に業務を進めることが困難になっている。野嶋らのいう細かい家族、治療に介入する家族のように、訴えが多い家族の場合も、看護者にとっては専門的領域に侵入され自信を揺るがされる体験となり、対応困難と感じると思われる。

2. ニーズを把握しにくい患者・家族

看護者は援助の必要性を感じているが、家族の訴えが極度に少ないため援助の方向性が妥当か分からない。そのため、適切な援助ができたか否かの評価ができないことに、専門職としての無力感を感じているのではないと思われる。

3. 他病院と比較する家族

看護者は他病院と比較された場合、家族に自分たちの方法、存在自体を否定されたという感情を抱くと思われる。オーランドは相互作用の重要性を述べているが、看護者は家族に比較されることによって、家族に否定的な感情を抱き、対応困難を感じている。

4. 医療者として介入できない問題を抱えている家族

家族のもつ問題やニーズを充足することができれば、家族と共に一緒に立ち向かえるが、経済的な問題などは看護者だけの力ではどうにもできないことに対し、無力感を感じていると考える。

5. 患者の状態について理解不足の家族

家族は子どもの様子を常に観察する者として、看護者とは違った視点でその子どもの変化を捉えるが、必ずしも医学的な根拠があるとは限らず、看護者と家族の捉え方に違いがみられることも多い。看護者は専門職としての経験や自信に裏打ちされた捉え方や考えを持っており、家族の特性を考慮しつつ、自らの専門性も活かしながら関わることに難しさを感じている。

VI. おわりに

本研究の結果を踏まえ、現在病棟ではこのような家族に関してその要因を把握し、カンファレンス等を利用して、できるだけ家族の思いに添った関わりが持てるよう取り組んでいる。

〔平成13年11月15～16日、鹿児島市にて開催の第32回日本看護学会（小児看護）で発表（抄録を掲載した）〕